

—編集後記—

新型コロナウイルス感染症のパンデミックへの対応から、今年度が始まりました。4月に日本政府が緊急事態宣言を発出し、感染拡大防止のため、1か月半の不要不急の外出を避けて、多くの人が行動を自粛する状況が続きました。ウイルスの感染は世界中に拡大し、11月の時点で感染者数は5千万人に達しています。日本だけでなく、世界中で大学や研究機関の活動が大幅に制限され、多くの学会の年次大会は、オンラインで口頭ならびにポスター発表を開催することを余儀なくされています。

世界中が未曾有のパンデミックの真っ只中ですが、いつもと同じように季節は移り変わっています。今年は、梅雨の長雨が続き、その後連日の猛暑に見舞われたと思ったら、気がつくや冷涼な秋が訪れていました。新型コロナウイルス感染症の対応に明け暮れていたなら、あっという間に時が経っていた感じがします。

ここに、第146号の土壌の物理性をお送りします。本号には、論文、土粒子のほか、5月に開催された日本地球惑星科学連合(JpGU)大会において、学会員が主催したセッションの報告が掲載されています。この大会は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、オンラインで開催されました。また、10月下旬に開催される土壌物理学大会も、オンラインで開催されました。今後の学会大会は、オンラインによる開催が増えていくと思われます。

9月にオンラインで開催されたある学会の年次大会に参加しましたが、思いのほか楽しめました。それに、オンラインでの開催には、多くの利点があることにも気づきました。当初は、発表時の機器の不具合や進行の遅延など、予期しない問題が生じるのではないかと心配していました。しかし、参加してみると、ポスター発表の時間帯を気にする必要がなく、興味のあるすべての発表内容をじっくりと見ることができました。発表内容に関する質問もオンライン上で応答が可能で、従来の発表様式よりも便利で快適に感じました。

一方、学会大会がオンラインで開催されたことによって、参加者の交流が希薄になったのは事実です。学会大会への参加者は、最新の研究情報を得ることだけでなく、普段は会うことが少ない恩師や、研究の同志と再会することも、目的の一つとしています。毎年の学会大会において、懇親会で恩師の激励を受け、同志の秀でた成果や活躍に触発されることが、活動の推進力になっている人もいることでしょう。10月末日の土壌物理学大会もオンラインで開催されましたが、恩師や同志と対面で再会する機会がなくなったことを残念に感じた人は多いと思われます。私もそのうちの一人です。いつも学会大会で会うたびに、他大学の教員との恒例行事となっていた早朝のランニングが、今年はやむなく自主練となったことが残念でなりません。

橋本洋平（編集委員）

土壌物理学学会

事務局構成	会 長	足立 泰久	筑波大学 生命環境系	
	副 会 長	小林 政広	森林研究・整備機構 森林総合研究所	
	事務局長	山下 祐司	筑波大学 生命環境系	
	庶務幹事	小島 悠揮	岐阜大学 工学部	
	編集幹事	朝田 景	農研機構 農業環境変動研究センター	
	会計幹事	西脇 淳子	茨城大学 農学部	
	会計監査	岩田 幸良	農研機構 農村工学研究部門	
		西田 和弘	農研機構 農村工学研究部門	
	編集委員会	委 員 長	江口 定夫	農研機構 農業環境変動研究センター
		委 員	赤羽 幾子	農研機構 農業環境変動研究センター
			飯山 一平	宇都宮大学 農学部
		片柳 薫子	農研機構 農業環境変動研究センター	
		久保田富次郎	農研機構 農村工学研究部門	
		小林 幹佳	筑波大学大学院 生命環境科学研究科	
		佐野 修司	摂南大学 農学部	
		鈴木 克拓	農研機構 中央農業研究センター（北陸研究拠点）	
		高橋 智紀	農研機構 東北農業研究センター（大仙研究拠点）	
		釣田 竜也	森林研究・整備機構 森林総合研究所	
		常田 岳志	農研機構 農業環境変動研究センター	
		橋本 洋平	東京農工大学大学院 農学研究院	
		深田 耕太郎	島根大学 生物資源科学部	
	淵山 律子	農研機構 九州沖縄農業研究センター		
	百瀬 年彦	石川県立大学 生物資源環境学部		
	渡辺 晋生	三重大学大学院 生物資源学研究科		